

群馬県教育イノベーション会議（第1回）議事概要

1 日時

令和2年12月24日（木） 10時30分～12時00分

2 場所

群馬県庁6階 秘書課会議室（Web会議）

3 出席者

会議構成員5名、県関係者8名

4 議題

- (1) 教育現場の業務改善に向けた指導体制や環境整備のあり方
- (2) 「始動人」を生み出す新たな学びのあり方

5 構成員の主な意見

(1) 教育現場の業務改善に向けた指導体制や環境整備のあり方

- ・ 総合計画の「始動人」を置き換えると、子供たちが「自律」をすること、自分の頭で判断し、行動を始める人と理解した。特別な子ではなく、みんながそういう人になることが、社会を変えていくためにとっても大事。
- ・ 先が予測できない世の中を生きていく子供たちにとっては、一斉型の学びだけではなく、自分で考え、学びを設計していく力が必要。ICT教育は、そこにすごくマッチしている。ICTを子供たちの思考の道具として、それぞれの学びを設計するために使っていく。
- ・ 学校現場を変えるのは本当に難しく、端末やネットワークが整備されても使えない状況が作られていくのではないかとこの危惧を抱いている。
- ・ 比較的若い年代の先生はICTの利用に意欲的だが、学校運営の中核を担う先生や管理職の先生はICTの利用を不安に感じている。若い人たちがもっと前に出られるよう、組織づくりをしていくのが管理職の大きな仕事。群馬県においても、現状に切り込んでいけるリーダーを選出する、昇任させるようなシステムが必要となる。
- ・ ICTを、必要な時に使うツールではなく、インフラとして考えることで学びのあり方は大きく変わる。ICTにしかできない学びを創造し、自学と振り返りのループで自己調整を育むという新たな授業展開モデルを学校現場で作り上げていく必要がある。プログラミング教育は、様々可能性を開くトリガーとなる。
- ・ GIGAスクール構想の成否は、子供がパソコンやタブレットを家庭に持ち帰るかどうかにかかっている。子供たちは、学校で習わなくても、家でパソコンを触る中で学べるため、この時間を作ってあげることが重要。
- ・ 今の学校現場が持っているアナログ教育はとても重要。アナログの部分は保ちつつ、どうデジタルを生かしていくかというのは、子供たちがパソコンやタブレットを、場面に応じて自由使い込んでいくにかかっている。
- ・ 全てオンラインではなく、リアル授業とオンライン授業をいかに組み合わせるかということから導入していくと、現場の先生方が入ってきやすい状況をつくれるのではないかと。

- ・ 今回のコロナで、正解がいくつもあるような社会、予測困難な時代をどう生き抜くかを子供たちに教えなければならないことを突きつけられた。
- ・ 1人1台端末導入の授業における実践では、子供の学習状況が可視化できるようになったことで、かえって先生が難しさを感じる場面がある。
- ・ 教育インフラの整備にあたっては、群馬県がこれまで取り組んできた少人数学級の「さくらプラン・わかばプラン」と組み合わせて進めていただきたい。
- ・ 1人1台端末が導入され、従来の学校文化、授業観、評価観が大きく変革していくタイミング。自らの学びを自律して取り組める年頃になればいいが、小さい子については、先生がケアしていくことが必要。その点を踏まえると、今の時点では、少人数学級が良いと思う。
- ・ 現場にある課題を見据えていくことが重要。テクニカルな課題で言えば、通信環境の整備が十分でなく、何かをインストールするにも思ったより時間がかかるということが往々にある。
- ・ 課題や改善の提案を意見として出せる環境を作り、現場の先生たちからどんどん出しってもらうことが大事。上から降りてきたものだけをやるというマインドセットを変えなければいけない。
- ・ STEAM教育については、産官学が連携する。エコシステムとしてモデル化し、他ところで転用できるような形にしていくことも課題。
- ・ 日本の教育では、オープンクエスチョンを問う経験が少なく、いきなりゼロからやれと言っても難しい。経験することで、子供たちに限らず、先生たちにも分かることがあるので、まずは始めてみる、やってみることが大事。
- ・ 作り手の視点、自分ならどうするかという視点で考える経験が増えてくると、生徒、先生、周りの企業や保護者も含めて変わってくると思う。
- ・ 格差の是正という部分ではオープンソース、学校に通っていれば無料で使えるというものがあれば増えるほど、自分らしい学び方ができるようになる。

(2)「始動人」を生み出す新たな学びのあり方

- ・ 地元の決められた学校だけで授業を受けるということを崩していくことが、未来の子供たちを取りこぼさず育てていくことに繋がっていく。慣れた組織を離れて自分だけ違った場所で学ぶ機会を与えたり、不登校の子が受けられるよう授業を配信したりと、教育の多様性を県や国が作っていくべき。
- ・ ブラックボックス化した社会がイノベーションを阻むという考えの下、ブラックボックス化したもののルーツを探りながら考えさせるという学習プログラムを企業と連携して取り組んでいる。地域の企業やコミュニティの住民と連携しながら、リアルとオンラインを組み合わせることで、ダイナミックな授業が可能となる。そういった授業が出席として扱われれば、群馬県の未来が広がると思う。
- ・ 施策の全体像に「就学前」の子供たちの学びを加えてほしい。保護者も大きな関心を持ち、研究も盛んに行われている。
- ・ これから来るAIとの共生時代に備え、「AIリテラシー」に踏み込む内容が必要。
- ・ 民間企業との連携については、民間が新たに採用した職員のファーストキャリアとして、2年間、教育現場を経験させ、自分の職場に戻った後、何かの形で教育と（民間企業が）コラボするという仕組みを作れば、上手く回っていくと思う。
- ・ 先生が全て教える時代は終わったと思う。子供たちが様々な学ぶ環境が、インターネット上に多くあるので、どんどん活用すべき。教員は教える人ではなく、コーチやメンターとして、一人一人の学ぶニーズに応じた学びの環境調整をすることが役割と

なる。現場の細かな実践知を確保しながら、子供たちが主体的に学ぶ環境を開いていくことが必要。

- 各学校の通信環境が不十分なところもたくさんある。是非、確認していただき、整備を進めてほしい。
- 「始動人」というと、自分から縁遠いと思う人が出てくると思うので、そこを引きつけるための体験の場があるといい。みんなの中にある「始動人のかけら」を引き出すため、「始動人」の思想、マインドセットは、継続して発信していく必要がある。
- これからの学びはティーチングからコーチング、先生は生徒の学びの伴走をする。
- できる子はどんどん先へ進み、別の学習（STEAM や受験勉強など）に取り組み、本当にわからない子供がいたら一緒に見てあげる。あるいは友達同士が教え合う仕組みにする。手は離してもいいけれど、目を離してはいけない。ただし、教えない教育を実践するには、「人」が必要となる。

以上